

高校世界史教科書における西洋古代史 —その叙述のあり方—

安 井 萌*

はじめに

昨年(2006年)10月に明るみとなった、高校でのいわゆる世界史未履修問題が、学校現場に混乱をもたらし、社会的にも大きな問題となったことは、なおも記憶に新しい。筆者が勤務する岩手大学教育学部でも、ある学年を対象に緊急調査を行ったところ、実に3割近くの学生が世界史を履修していないことが判明した。¹⁾必修である世界史がかくも多くの高校で履修されずにいた理由は何なのか。おそらくそれは、受験に不要であるという外的な(そして最大の)要因に加え、科目それ自体の性質に起因している。そこに登場するおびただしい数の、しかもあまりなじみのない出来事、人名、地名等、諸用語や年号などが、生徒たちの頭脳に余計な負担を強いるというわけである。このことは、ここであらためて言い立てるまでもなく、前々から広く認識されてきたところである。

歴史は史実の積み重ねより構成されるものである以上、学習者にある程度の記憶力が求められるのは必然である。しかし憶える量が多すぎるとは学習者の意欲を失わせる。いかに意欲を持たせつつ憶えさせるか、教師たちが共通に直面する困難な課題である。他方でまた気をつけなければならないのは、歴史は単なる史実の積み重ねではない、ということである。無数に存在する諸事実のなかからあるものをピックアップし、何らか特定の観点のもとに配置し説明するという、「叙述」の作業がその本質をなしている。ナレーションのない、事実だけの歴史などありえない。しかもその場合、観点の持ち方は多様でありうるので、よって描かれる歴史像も唯一真正ではない。²⁾こうした諸事実を「つなげる」作業にこそ歴史の本質、また面白味はある。にもかかわらず、もし学習者がこれを単なる諸事実の羅列ととらえる傾向があるとするならば、それはまさしく教育の失敗といわねばならない。

さて、「詰め込み教育」の代表科目世界史を、ある意味で象徴するのが教科書である。300を優に越える頁のなかに、無数の用語や年号が間断なく流れる水の流れのように次々現れ出る。ところどころゴチックで表記され、「重要事項」たることを自己主張する。まるで年表のようである。これを一見して尻込みしないような生徒はそう居るまい。外国史研究を専門とする筆者自身、高校時代の世界史の印象は、教科書の内容のまず暗記であった。³⁾今現在の世界史教科書の記述も決して面白いものではない。なるほど「世界史への扉」の項の設定やコラムの多用などでかつてと比べ工夫がなされているものの、本文の説明は極度に圧縮され平板であり、

* 岩手大学教育学部西洋史学研究室

用語が前面に出ている印象は拭えない。こうした問題は、もちろんひとり教科書執筆者だけの責任に帰されるべきものではない。むしろ大学入試制度を始めとする様々な社会的文化的そして政治的背景にあって形作られた、教科書記述のいわば「叙述の伝統」と呼ぶべきものに、ただ彼らは従ったにすぎないのである。

したがって、上述のような意味での歴史の本質、面白さを認識し、それを生徒に伝えようと努力するすぐれた教師たちは、一様に教科書に不満を覚え、そこから離れた形での（独自のプリントや読本などを用いた）授業を追求するのである。⁴⁾とはいえしかし、通常の授業で中心となるのはやはり教科書であるし、受験を考慮するとなおさらである。教科書は大学受験を念頭に作られ、逆に大学入試問題は高校教科書の内容を参考に作られる。両者は相互影響関係にあるのである。加えて、かつての従軍慰安婦問題、近時の沖縄集団自決問題に関する教科書記述をめぐる論議に見るように、歴史教科書の内容というのは国民的（国際的）関心事とさえなっている。好むと好まざるとにかかわらず、国家権力の吟味を経て著されるそれは、一つの「正史」をなしているわけである。こうした現状にあって、教育現場で歴史を語る主体ヒストリアンが教師であることは違いないにせよ、やはり教科書が公然隠然たる影響力を保持していることは疑いないようである。⁵⁾

ところで高校世界史教科書は、はたして年表のごときものなのであろうか。そう思わせる要素が充満していることは述べた通りである。だが実際そうとばかりいえない。教科書は確かに諸事実を取捨選択し、それらを意識的に「つなげて」語ろうとしている。そもそもただ事実の集積にのみ終始し、一切語らない歴史の書き方など不可能である。何らか一貫した史観に基づくかどうかはともかく、間違いなくそこでは叙述がなされているのである。小稿はまさにこのような認識のもと、世界史教科書を一個の歴史叙述ととらえ、読み直してみようとするものである。国民の多くが一度は手に取る、そして一つの「正史」にも位置づけられる歴史書の叙述のあり方はどのようなものなのか。この点をあらためて確認することは、単に興味深いというばかりでなく、教科書を用いて（たとえ批判的にであれ）歴史を語ろうとする教師にとって教材理解の必須の前提とさえいえるだろう。

考察の対象として、具体的には西洋古代史（ギリシア・ローマ史）に限定したいと思う。これは筆者の専門に引き寄せてのことである。世界史の本領はもちろんまずその全体的枠組みにあるといえようが、「世界史の叙述」についてトータルに論ずることはとても筆者の手に余るし、またそれは学習指導要領に明確に定められる部分でもある。あくまでここでは特定の地域・時代にしばって、教科書執筆者に委ねられる範囲での叙述のあり方を見ていきたい。

中心的に使用するテキストは、最新版（平成19年度版）の各社の主な世界史B教科書である。列举すると、三省堂『世界史B』（以下、三省堂）、実教出版『世界史B』（実教）、第一学習社『高等学校世界史B』（第一）、帝国書院『高等世界史B』（帝国）、東京書籍『世界史B』（東書）、山川出版社『詳説世界史B』（山川）の6種である。その他、必要に応じて他種また平成19年度以前の教科書を適宜参照する。

1. 西洋古代史の枠組み——「地中海世界」

まずは西洋古代史の大まかな枠組みから見てみよう。

各種教科書の全体的章立てにおいて、おおよそギリシア・ローマ史は「西アジア・地中海世

界」のなかに含み込まれている（三省堂、実教、第一、帝国）。この「西アジア・地中海世界」という枠組みは学習指導要領に明記された形である。平成11（1999）年改訂学習指導要領は、世界史の第一段階を「諸地域世界の形成」段階とし、そこに「西アジア・地中海世界」「南アジア世界」「東アジア・内陸アジア世界」を位置づけている。4種の教科書はよって枠組み・文言ともに学習指導要領にそのまま倣ったということになる。少しばかり異なるのが山川であり、「西アジア」の代わりに「オリエント」の語を用いている。枠組みそのものは他と同じである。より異質なのが東書である。これは「西アジア・地中海世界」の枠を一括せず、さらに二つの章「オリエント世界と東地中海世界」「地中海世界と西アジア」に分割・並置している。

さて、この「地中海世界」を教科書はどのように説明しているのだろうか。手始めに実教をひもとくと、「西アジアと地中海世界」の章の冒頭でごく簡単な全体の概観がなされたあと、「西アジア・地中海世界の風土」の項目が来る。関係する部分を引用すると、

「地中海を囲むヨーロッパと北アフリカの沿岸地域は、総じて夏に乾燥し、冬に温暖湿潤な地中海性気候である。山が海岸にせまり、平野や川は恵まれない。農耕地はせまく、土壌はかわいて浅い。したがって作物の収穫率は低く、大規模な農業の発展はむずかしかった。陸の交通は障害が多く、海が交通手段として最適であった。」（30頁）

乾燥した気候、地形・土質など農耕に不利な諸条件、といった地中海地域の自然的特性がまずもって語られる。これはほぼすべての教科書にあてはまる構成である（三省堂「西アジア・地中海世界の自然と歴史」、第一「地中海世界の風土」、帝国「西アジア・地中海世界の風土と人々」、山川「地中海世界の風土と人びと」、東書では例外的に自然・風土への言及はあまりない）。さらにこれと合わせ述べられるのが、地中海を介した人や物の交流である。「地中海は交易だけでなく、文化の伝播にも重要な役割を果たし、沿岸諸地域とオリエント各地をつなぐネットワークの形成に重大な貢献をなした。このネットワークは、その後の文明を生み出す基礎ともなった」（帝国29頁）、「地中海は沿岸地域と島じまとをむすぶ交通路となり、人びとの往来は活発だった」（三省堂9頁）、「古代地中海世界が一つのまとまった文化圏を形成したのは、地中海が重要な交通路となっていたからである」（山川31頁）。全体として見渡すと、したがって、共通の気候・風土に規定されつつ地中海を介し一つにまとまっていく文化圏、それが地中海世界であるとのイメージが描かれよう。最も明確な表現は第一に見られる、

「人々は早くから海岸の平野や盆地に集落をつくり、しだいに都市国家を形成していった。いずれもせまい領土の国家で、すべての生活物資を自給することはできなかった。そのため地中海を交易路として、たがいに必需物資を取引し、地中海地域を政治的・経済的・文化的にまとめた世界にしていった（地中海世界）。」（31頁、ゴチックは原文）

ただし、このように地中海世界なる言葉自体がはっきり概念規定されることは少ない。一般的には、それがやや漠然としたイメージのまま留め置かれていることは否めない。

教科書から読み取れるもう一つの「地中海世界」のイメージが存在する。それは地中海世界すなわちローマ帝国というものである。こうした理解を鮮明に打ち出すのが、東書である。先述のごとく、東書の章立ては他と異なり、オリエント・ギリシアとローマとを別にしてしている。そしてギリシアは東地中海世界、ローマは地中海世界と表現される。「地中海世界と西アジア」の章の冒頭、総説の一部を引用しよう。

「さらにローマは、海洋国家カルタゴの勢力を打倒し、西地中海に覇権をふるうことになる。東方にも進出してギリシアやオリエントの先進文明の諸勢力をも傘下におさめ、前1

世紀末にはまさしく地中海全域を統合する世界帝国となった。この地中海世界帝国のもとで、広大な地域に長期にわたる平穏な状態が実現し、後世に「人類史の至福の時代」(E・ギボン)とたたえられるほどであった。そこでは、オリエント、ギリシアなどの先進文明とガリアなどの地域固有の土着文化が融合し、地中海世界は「ローマの平和」のもとで空前の繁栄を享受した。」(44-5頁)

ここでは地中海沿岸諸地域の多様性と、それらを統合したローマ帝国の役割の大きさがとりわけ強調される。地中海世界すなわちローマ帝国と明言されこそしないが、一層踏み込んでいるようなのが、山川出版社の別種の世界史B教科書『新世界史』である。同「地中海・西アジア世界」の総説には次のようにある。

「地中海という共通の自然条件のもとで、それぞれ独自に発展したこの地方の諸民族は、やがてそのなかから生まれたローマ帝国に統一される。長い「ローマの平和」のもとで、経済的にも文化的にも融合されて、ここに「地中海世界」という一つの歴史的世界が誕生する。」(平成19年版, 29頁, ゴチックは原文)

これに対し他の教科書は、地中海世界がローマにより統合されたとはするものの、ローマ帝国を地中海世界概念とは一応切り離しているように見える。

これら地中海世界の二つのとらえ方は必ずしも相矛盾するわけではない。地中海沿岸地域に自然的に発展した一つの文明圏は、最終的にローマ帝国により政治的に統一され、融合した、と整合的に理解できよう。かつてローマ史学者弓削達が述べた言葉を借りれば、

「地中海世界などと大袈裟なことを言っても、結局それはローマ帝国のことではないか、という批判は、・・・事柄として見れば、一面では妥当するが、しかし他面では妥当しない。妥当するというのは、「地中海世界」は・・・ローマ帝国なしには考ええないからであり、妥当しないというのは、「地中海世界」は正にローマ帝国ではないからである。」(傍点は原文)⁶⁾

まさにこの弓削自身の手になると思しき、先述山川『新世界史』における「[地中海世界]という一つの歴史的世界」との記述は、したがって二つのレヴェルの概念を区別しての言い回しも解される。すなわち「ローマ帝国の征服と「支配」によって現実的に一つの世界になることを得た、という意味で」(傍点は原文)⁷⁾の「一つの歴史的世界」である。

とはいえ、地中海文明の自然的な一体性と多様な集合体のローマによる人為的一体化と、どちらにウェイトを置くか、ニュアンスの違いはありそうである。ギリシア・ローマ史を全体として「地中海世界」の枠組みに括る指導要領の構成からすると、力点はどちらかといえば前者にあるとしなければならない。そうした意味では、構成的には多くのもの同様指導要領にそのまま倣う『新世界史』は「ねじれ」を孕むともいえる。一方東書は、西洋古代を「地中海世界」に一括する仕方そのものを取らない。ギリシア史を東地中海世界として位置づけ、むしろ西アジア(オリエント)世界との緊密な交流のなかに描き出す東書のやり方は、それ自体学問的にきわめて妥当なものといえる。⁸⁾他の教科書でも、「東地中海」「地中海東部」と東方世界との「ネットワーク」「複雑な国際関係」、また「オリエントからの影響」といった点が強調される(三省堂, 実教, 帝国, 山川)。しかし東書にあっては、ギリシア史とローマ史の枠が分離された結果、「地中海世界」はローマの統一によりはじめて現出するという形になる。教科書間における基本的な叙述のあり方の違いがここに見て取れよう。

「地中海世界」がはじめて諸文明の一つの名称として、指導要領の見出しに採用されるのは、

平成11（1999）年度改訂においてである。それ以前の表記は「地中海文明」であり、これは昭和45（1970）年「文明圏」学習導入にさかのぼる（ただし平成元（1989）年指導要領で見出しには「地中海文明」とある一方、説明文に「古代地中海世界の歴史を概観させる」と「地中海世界」の語が用いられていることは注目される）。周知のごとく、昭和45年の改訂は従来の一般的な古代・中世・近代という三時代区分をやめ、世界史を前近代・近現代に大きく二区分したうえ、前近代を四つの「文明圏」の形成・発展過程としてとらえ直した。⁹⁾ これにより、西洋古代は教科書上、以後「地中海文明」圏として現れることとなったのである。1960年代の教科書にあっては、ギリシア・ローマ世界はほぼ「西洋古代」もしくは「古代文化」の見出しのもとに括られるのに対し、1970年代は一斉に「地中海文明」の言葉に入れ替わる（例外はあるが）。興味深いことに、そうしたなか70年代前半の段階ですでに「地中海世界」が教科書の見出しに登場している（帝国『高等世界史』、実教『世界史』）。¹⁰⁾

「地中海世界」の概念は三時代区分の放棄とともに教科書に導入された。実際、現在の教科書の多くにおいて、ギリシア・ローマ史の記述に「古代」の言葉はあまり見えない（「古代ローマ」といった、一般的表現の形で散見するが）。三時代区分的意味での「古代」がすっかり消え去ったわけではない。山川では、「オリエントと地中海世界」の総説の冒頭、「オリエントと地中海周辺地域の古代文明をとりあげる」とあり（21頁）、かつ「ヨーロッパ世界の形成と発展」の総説の冒頭は「西ローマ帝国がほろびた後、ヨーロッパが中世とよばれる時代にはいつから千年ほどの時代を扱う」と（116頁）、目立たない仕方ながら古代（＝地中海世界）・中世の区分を維持している。また東書は、ローマ帝国末期に関する記述の見出しを「古代末期の社会と地中海世界の解体」としているのが注意を引く（ただし本文中に「古代」の語は見えない）。ひと口に「地中海世界」とは言っても、弓削の言を借りれば「われわれの言う地中海世界とは、歴史のある時に成立し、歴史のある時に崩壊した、かぎられた歴史的世界である」¹¹⁾ との認識は、一般に共有されるところであろう。すなわち教科書で区分される「地中海世界」とは、単に自然的諸条件を同じくする通時の存在ではなく、あくまで「ある時」＝「古代」という暗黙の前提を含むのである。ほかならぬ指導要領（平成元年度）にも、「古代」の「地中海世界」とある。にもかかわらず、現在の教科書記述にあって「古代」の表現が後景に退いているのは、争えない事実である（三時代区分を維持する山川には、「古代地中海世界」の表現が比較的目標立つようである）。

さて、地中海世界の本質的特徴は何か。この問いに対する答えは、執筆者の史観のある意味最も端的な表出ともいえようが、しかし教科書で明確に語られることはあまりない。数少ない例として第一を挙げられようか。先に引用した、地中海世界の概念規定を述べる箇所は、さらに次のように続く。

「自由で独立した都市国家の市民たちは、人間的で合理的な文化を育て、ギリシア・ローマ文明は、後世のヨーロッパ文明の形成に大きな影響をあたえた。」（31頁）

また山川『新世界史』の総説では、

「（ギリシア・ローマ人は）はじめ村落をつくって生活していたが、オリエントの発達した文明の影響下に、やがて各地で都市国家を形成した。彼らはオリエントとは正反対に、政治的にも精神的にも自由な市民の文化を開花させたので、ルネサンス期のヨーロッパ人によって「古典古代」と呼ばれた。」（29頁、ゴチックは原文）

都市国家の自由な市民が作り上げる文化、というのが両者に共通する理解といえる。「市民」「都

市]などは他の教科書にもしばしば現れる、地中海世界の叙述に特徴的なキーワードである。例えば、ポリス中心に叙述が展開するギリシア史のみならず(2節参照)、ローマ史にあっても、都市の繁栄と衰退が帝国の発展・衰退の一つの指標とされる(3節参照)。行間を読み取れば、これらを地中海世界の中心的要素と見なす考えは、大方の教科書記述に通底する最大公約数的な史観と見なすことができるかもしれない。とはいえ、全体的にはやはり、地中海世界の本質が明確に(執筆者の自覚と責任をもって)語られる場合は少ない。またさらに進んで西洋古代の市民社会や都市の意味づけ、世界史上の意義にまで言い及ぶことは、どの教科書でもなされない。これははたして教科書で本来語られるべき事柄なのだろうか、それとも教室の語り手たる教師に委ねられるべき性格のものなのだろうか。

2. ギリシア史の叙述

続いては、教科書における細部ではなく全体的な叙述の特徴を、ギリシア・ローマ史それぞれについて確認していきたいと思う。まずはギリシア史であるが、手始めに各教科書の関係部分の見出しを並べてみよう。

- | | |
|------------------|---|
| 三省堂 「ギリシアの繁栄」 | : 小見出し 「エーゲ文明」 「ポリスの形成と発展」 「ポリスの全盛と衰退」 「古代ギリシアの文化」 |
| 「ヘレニズム時代」 | : 小見出し 「アレクサンドロスとその後継者たち」 「ヘレニズム時代の文化」 |
| 実 教 「ギリシアのポリス世界」 | : 小見出し 「ポリスの成立」 「スパルタとアテネ」 「アテネ民主政の進展」 |
| 「ポリスの発展と衰退」 | : 小見出し 「ペルシア戦争」 「アテネの繁栄」 「ペロポネソス戦争とポリスの衰退」 「ギリシアの文化」 |
| 「ヘレニズム世界」 | : 小見出し 「マケドニアの発展」 「ヘレニズム世界とその文化」 |
| 第 一 「ポリスの成立と発展」 | : 小見出し 「ギリシア人とポリス」 「スパルタとアテネ」 「ポリスの変質とギリシア文化」 |
| | : 小見出し 「ポリスの変質」 「ギリシア文化」 |
| 「ヘレニズム世界」 | : 小見出し 「ヘレニズム時代」 「ヘレニズム文化」 |
| 帝 国 「地中海世界の動き」 | : 小見出し 「エーゲ文明」 「古代ギリシアの発展」 「スパルタとアテネ」 「ペルシア戦争」 「古代ギリシアの文化」 「ヘレニズム時代」 「ヘレニズム文化」 |
| 東 書 「ギリシア世界」 | : 小見出し 「東地中海の海洋文明」 「ポリスの成立」 「アテネとスパルタ」 「ペルシア戦争と民主政」 「ペロポネソス戦争とポリスの変容」 「ギリシアの古典文明」 |
| 「ヘレニズム世界」 | : 小見出し 「アレクサンドロスの東方遠征」 「ギリシア系王国の分立」 「ヘレニズム文明」 |
| 山 川 「ギリシア世界」 | : 小見出し 「地中海世界の風土と人びと」 「エーゲ文明」 「ポリスの成立と発展」 「市民と奴隷」 「民主政へのあゆみ」 「アテネ民主政とペルシア戦争」 「ポリスの変質」 |

とヘレニズム時代]「ギリシアの生活と文化」

見出しの概観から、あらゆる教科書に共通する、ギリシア史の叙述の基本線がおおよそ浮かび上がってくるであろう。それはギリシア史とはポリスの歴史に他ならない、とするものである。多少の言葉づかいの相違はあるものの、ポリスの「成立(形成)」→「発展」→「衰退(変質)」としてそれは描かれる。いちばん分かりやすいのが三省堂と第一であろう。ギリシア史を見出しのうえで大きくポリス時代前半と後半とに分けている(三省堂「ポリスの形成と発展」「ポリスの全盛と衰退」、第一「ポリスの成立と発展」「ポリスの変質とギリシア文化」)。この場合、前ポリス時代であるエーゲ文明とポリス「衰退(変質)」後であるヘレニズム期の位置づけには、多少違いが見受けられる。前者については、あくまでこれをギリシア史の枠内にとどめるものと(三省堂、帝国、東書、山川)、ギリシア史に先行する「オリエン特世界」に含めるもの(実教、第一)がある。ヘレニズムの場合、やはりギリシア世界とは分けるものと(三省堂、実教、第一、東書)、そうでないもの(帝国、山川)が並立する。いずれにせよしかし、ポリスの発展・衰退の過程をギリシア史の中心ととらえる見方に基本的相違はなからう。

ここでは山川の叙述の流れを追ってみよう。まず「ポリスの成立と発展」では、エーゲ文明崩壊後の混沌状況におけるポリスの形成とギリシア(ポリス)世界の拡大、政治的不統一の一方でギリシア民族の文化的一体性が述べられる。ついで「市民と奴隷」で農業市民と奴隷からなるポリスの内部構成のあり方が説明される(この関連でスパルタとアテネの対比がなされる)。さらにアテネの場合について民主政成立の過程を、ドラコンの立法からソロン改革、ペイシストラトスの僭主政、クレイステネスの改革を経て、ペルシア戦争後ペリクレス期にいたるまでたどり、最終的に確立した民主政体制の実態・特徴を明らかにする(「民主政へのあゆみ」「アテネ民主政とペルシア戦争」)。つづく「ポリスの変質とヘレニズム時代」では、ペロポネソス戦争後におけるポリス世界の混乱とポリス社会の変質、そしてマケドニア台頭からヘレニズム時代がひとまとめに論じられるが、山川の記述で特徴的なのは、後者の時期を完全なポスト・ポリス時代としてではなく、「ポリスはマケドニアに征服されて政治的独立を弱めたが、ポリスを原型にした文明生活の基盤としての都市は、その後もなお古代地中海世界に生き続けていった」と(39頁)、そのポリス時代からの連続性を強調していることである。最後に「ギリシアの生活と文化」で、ポリスの精神風土に育まれた、「明るく合理的で人間中心的な文化」が略述される。

ポリスの歴史と特性に収斂した、実に一貫したギリシア史の叙述である。もっともこうした一貫性は、あまたある諸ポリスのうちもっぱらアテネにのみ話題を集中する、いうなれば徹底したアテネ中心主義に裏付けられているともいえる。もう一つの強国スパルタに言及するにしても、山川は奴隷制の論議の一環にこれを組み入れることにより、見事な叙述の連続性を確保している(この点で、他の教科書は「スパルタとアテネ」といった項目を立てることにより、アテネ中心主義のある意味で一貫した叙述の流れを部分的にそこねている)。

ギリシアの歴史はポリスの歴史である。ならばポリスとは一体何か。ポリスそのものに関する説明は、どの教科書でもポリスの成立の部分でなされる。三省堂を例に取れば、

「前8世紀になると、貴族たちは小高い丘(アクロポリス)に守護神を祭る神殿を建てて、そのふもとに集住(シノイキスモス)し、広場(アゴラ)を政治・経済活動の場として平民を支配した。こうして生まれた小さな都市国家をポリスという。そこでは市民である成人男子が私有地(クレーロス)を割り当てられて、農業を行った。ポリスの間には戦争が

たえず、ギリシア人が一つの国にまとまることはなかった。しかしギリシア人は、自分たちが共通の言語・文化・宗教をもつヘレネスであるという民族意識をもち、異民族をバルバロイとよんで区別した。」(18-9頁、ゴチックは原文)

アゴラやアクロポリスからなる都市国家、ギリシア全体の政治的まとまりの欠如と民族意識、これらはあらゆる教科書に遺漏なく見られる概念説明である(アクロポリス、シ〔ユ〕ノイキスモス、アゴラ、ヘレネス、バルバロイなど諸用語は6種すべての教科書に現れる)。特徴的なところでは、山川が「ポリスは、城壁でかこまれた市域と周囲の田園からなりたっていた」として、都市的部分ばかりではないポリスの構成(前記の説明からでは、そのような部分ばかりが強調されかねないが)を明らかにしていることが注目される(34頁)。ともあれ、いずれも主に景観の観点よりポリスの一定のイメージをはっきり描き出そうとしていることが見て取れる。ではこのようなポリスを舞台に展開したギリシア文明の特質とはどのようなものか。実のところこうした本質論が教科書で問題とされることは、前節で見た地中海世界の場合と同様、あまりない。ある程度まとまった見解を提示するのは山川ぐらいであろう。同「オリエントと地中海世界」冒頭の総論に次のような記述がある。

「エーゲ文明崩壊後に出現した**ギリシア文明**は、ポリスという独特の社会のしくみから生まれた。ポリス社会は、奴隷制がその経済的基盤ではあったが、専制王権がなく、独立した市民たちの共同体であった。そこでは上からの命令ではなく、対等な議論による説得が人びとを行動に向かわせた。ここから直接民主政が発生した。市民の自治に根ざしたポリス社会は、古代地中海世界の基礎となる都市生活の原型となり、また人間中心的で合理主義的な精神文化をうみだした。」(21頁、ゴチックは原文)

ポリスとは要するに「独立した市民たちの共同体」であり、「市民の自治に根ざした」その社会は「直接民主政」を生み出した。市民の自由・独立といった表現は、これほどまとまった形ではないにせよ、他の教科書でも見られる、「市民は農業を主として、経済的に自立し、自由な市民であることを誇りとした」(実教40頁)「自由な市民としての生活」(帝国42頁)。したがって全体として見れば、ギリシア文明最大の特徴を自立的な市民の営みに見ようとするのは、共通の描き方といえるかもしれない。しかしまた市民の自由・独立は近代的価値観を投射しやすい概念だけに、うがった見方をすれば、教科書によっては、慎重にもあえて抑制的な書き方をしているのだとも考えられる。例えば三省堂が「自由な市民だけが国政に参加できる」といった注釈をわざわざ施したり(21頁註3)、奴隷制との関連で「ギリシア人の社会は奴隷労働のうえになりたっていた。・・・生産労働から解放された市民は、自由に使える時間を政治活動にあて、民会に出席したり役人の任務についたのである」と述べたりしているのは(同頁)、うるわしい「自由な市民」の観念に対するこの種の(マルクス主義史観的な)留保のようにも読み取れる。

アテネ中心主義と自由な市民の強調とがおのずと導くのは、民主政のクローズアップである。この点、民主政を中核とした叙述の流れがとりわけ明瞭なのは山川である。あらかじめ総説において、「専制王権がなく、独立した市民たちの共同体」の行き着くところ「直接民主政」が現れたと総括したうえで、ポリスの発展を民主政の確立過程として描く。もちろん他の教科書もまた民主政を扱っているが、しかしどちらかといえばアテネ史の展開をたどるなかで、あくまでその枠内で話題にするという印象である。これに対し山川は、「民主政へのあゆみ」との見出しを掲げ、民主化があらゆるポリスに普遍的な現象であるとしつつ、「民主政が典型的な

形で出現した」(35頁)例としてアテネの場合を詳述するのである。アテネを中心としながらも、民主政の発展をポリス世界全体の発展と重ね合わせ、先述のごとき際立った一貫性をもって叙述するのが山川の特徴であろう。そこにあっては教科書執筆者の古代民主政に対する強い思い入れ、またこれをギリシア史のハイライトとして描こうとする執筆態度がかなり明瞭に見取れる。

ギリシアの民主政の世界史的意義を評価する態度は、山川を最右翼とし、他でも大なり小なり共有されていることは間違いない。第一は「ギリシアで生まれた民主政」と題する次のような小コラムを設定している。

「民主政では「官職はくじで選ばれ、選ばれた役人には責任があり、すべては公的な討議にゆだねられる」(ヘロドトス)。耕地の貧弱なギリシアでは、貧しい中小農民が多く、もめごとを「真ん中に置いて」相談する習慣があった。これが祖国防衛を公平に分担する重装歩兵の密集隊戦法と結びついて、政治参加の平等を実現する民主制度を生みだした。」(40頁)

デモクラシーの故郷ギリシアを強調するのは、遠く隔たった現代日本で学ぶ者たちの興味を引き立て、学習効果を高める観点からも有意義であろう。¹²⁾しかし強調の度合いは教科書によって異なる。例えば東書は、まず「アテネとスパルタ」と題する項で、ソロン改革からクレイステネスの改革にいたるアテネの歴史を略述し、後者の結果「民主政への一步をふみだした」とするが、つづいて「ペルシア戦争と民主政」でペルシア戦争とデロス同盟結成を述べたのち、民主政についてはただ、

「隆盛を誇るアテネでは、軍船の漕ぎ手として活躍した下層市民も国政に参加するようになり、ペリクレスの指導のもとで民会を中心とする徹底した民主政が実現された。ほとんどの公職が市民から籤で選ばれ、また成年男子市民のすべてが集まって議決した。このようなポリスの運営は**直接民主政**とよばれる。」(40頁、ゴチックは原文)

とするのみである。そして直後の「ペロポネソス戦争とポリスの変質」では、

「デロス同盟を率いるアテネがますます勢力を増すと、ペロポネソス同盟の盟主スパルタとの対立が深まり、前431年**ペロポネソス戦争**がおきた。アテネでは、ペリクレスの死後、煽動政治家(デマゴーグス)が数多くあらわれて民主政は衆愚政治におちいり、ペルシアの支援を得たスパルタにやぶれた。」(40頁、ゴチックは原文)

と民主政の衰退が語られる。いささか素っ気ない印象を与えるのは否めない。素っ気なさは全体的な記述の分量のためもあるが、同じように簡素な帝国では、

「アテネでは軍艦のこぎ手として活躍した無産市民の発言権が増して、成年男子市民全員が出席する**民会**が国政の最高決定機関となり、民主化が進んだ。そして、前5世紀後半に、長くアテネの政治を指導した**ペリクレス**のもとで、多くの改革がなされて古代の民主政が完成した。しかし、今日の民主政治と異なって**直接民主政**であり、また参政権は成年男子市民に限られ、女性や奴隷には認められていなかった。」(41頁、ゴチックは原文)

と、情報量は抑えられているものの古代民主政の意義を浮き出させるような書き方となっている。ともあれ、民主政に関する記述の詳しさを他を圧するのは、山川である。

「アテネは強大な海軍力を背景にほかの同盟諸国に対する支配力を強める一方、国内では軍艦の漕ぎ手として戦争に参加する無産市民の発言力が高まった。これを背景に前5世紀なかばころ、**将軍ペリクレス**の指導のもとでアテネ民主政は完成された。そこでは成年男

性市民の全体集会である**民会**が多数決で国家の政策を決定し、将軍などの一部をのぞき、一般市民から抽選された任期1年の役人が行政を担当した。裁判は、やはり抽選された多数の陪審員が、民衆裁判所において投票で判決をくださった。市民は貧富にかかわらず平等に参政権をもち、できる限り多くの市民が政治に参加することを求められた。他方、役人や政治家の責任は弾劾裁判などできびしく追及された。

このような民主政は、デロス同盟を中心としたギリシアの諸ポリスにひろまった。市民団のなかでは政治的平等が徹底している一方で、奴隷・在留外人・女性には参政権がなかったこと、代議制でなく市民全員が参加する**直接民主政**であったことなどが、現代の民主政治とのちがいである。だが民主主義という考え方を世界ではじめてうみだした点で、ギリシア民主政の世界史的意義は大きい。」(36-7頁、ゴチックは原文)

将軍、民衆裁判所、弾劾裁判、在留外人などへの言及は他にあまり見られないものである(前二者のみ、ほか実教に現れる)。記述の詳しさもさることながら、何より末尾の文句「ギリシア民主政の世界史的意義は大きい」が執筆者の見地を如実に物語っている。ペロポネソス戦争以降の状況に関する記述も特徴的である。多くの教科書は「煽動政治家」の跳梁とアテネ民主政の「衆愚政治」への墮落を語るのに対し(実教43頁、第一40頁、帝国41頁、東書は前掲引用参照、三省堂にはない)、山川は「敗戦後も民主政をまもり続けたアテネは勢力を回復」(38頁)とする。

さて、ギリシア史をポリスの歴史と見なす全体的理解にいま一度戻れば、山川が「ポリスの成立と発展」のところで、「ポリスは先進地域オリエントとの交易が容易な沿岸部を中心に成立したが、他方内陸部にはポリスがつくられないままにおわった地域もあった」(33頁)としていることは注目される。こうした非ポリス地帯が覚醒し、一斉に歴史の表舞台に踊り出るのがヘレニズム時代であった。一般にこの時期ポリスは衰退し、人々の個人主義的、世界市民主義(コスモポリタニズム)的意識が強まるとされる(三省堂25頁、第一43頁、帝国45頁、実教は「ポリスの枠にとらわれない個性の主張と世界市民主義」と(47頁)、また東書は世界市民主義や個人主義に言及はするが(43頁)、ポリスの「衰退」とは言わず「変容」とする、40頁)。だが山川は、事前に「ポリスがつくられないままにおわった地域」の存在に触れた唯一の教科書であるにもかかわらず、徹底してポリス中心のギリシア史叙述を貫いている。先述のごとくヘレニズム時代にもポリスは「文明生活の基盤」として生き続けたとし、またヘレニズム文化の箇所において「個人主義」や「世界市民主義」の言葉をまったく用いないのである(41頁)。

3. ローマ史の叙述

ついでローマ史の叙述の特徴を見ていくこととしよう。まずは各教科書の関連部分の見出しを掲げる。

三省堂 「地中海世界の統一とローマ帝国」

：小見出し「共和政ローマの成立」「共和政ローマの対外発展」「内乱の百年」「帝政の成立」「ローマの文化」

「ローマ帝国の分裂と西アジア」

：小見出し「キリスト教の成立と普及」「帝政の危機」「キリスト教の公認」「帝政の衰退」「西ローマ帝国の滅亡」

- 実 教 「ローマ帝国」 : 小見出し「都市国家ローマ」「ローマの地中海支配」「共和政の終末」「元首政」「ローマ帝国の変質」「専制君主政」「キリスト教の成立と展開」「ローマの文化」
- 第 一 「ローマの発展」 : 小見出し「共和政期のローマ」「共和政の変質」
 「ローマ帝国の盛衰」 : 小見出し「帝政期のローマ」「帝政の変質」
 「ローマ文化とキリスト教」 : 小見出し「ローマの文化」「キリスト教の発展」
- 帝 国 「世界帝国ローマ」 : 小見出し「共和政ローマの発展」「ローマ皇帝政治の成立」「世界帝国ローマ」「キリスト教の成立と発展」「後期ローマ帝国」「ローマの文化」
- 東 書 「都市国家から世界帝国へ」 : 小見出し「西地中海の諸民族」「ローマ共和政」「地中海世界の統一」「共和政国家の限界」「皇帝権力の成立」
 「ローマ帝国の繁栄」 : 小見出し「ローマの平和」「ローマの文明」「都市と民衆」「地中海世界の諸宗教とキリスト教」「帝国の混乱」
 「古代末期の社会と地中海世界の解体」 : 小見出し「ローマ帝国の変貌」「キリスト教の布教と聖なる世界」「ゲルマン人の大移動と帝国の分裂」
- 山 川 「ローマ世界」 : 小見出し「ローマ共和政」「地中海の征服とその影響」「内乱の1世紀」「ローマ帝国」「西ローマ帝国の滅亡」「キリスト教の成立」「迫害から国教化へ」「ローマの生活と文化」

教科書の叙述にあってギリシア史がまずポリスの歴史であるとするなら、ローマ史は何より「帝国」にその本質が求められるであろう。これは、前者に関する見出しの多くが単に「ギリシア（世界）」とある一方で、後者に関するそれは通例「ローマ帝国」とあることから明らかである（とくに帝国書院の全体の見出しは「世界帝国ローマ」である）。構成からしても、三省堂は全体を「地中海世界の統一」と「帝国の分裂」とに分けており、また東書は世界帝国の成立・繁栄・解体と三分している。大きな見出しとしては「ローマ世界」を掲げる山川も、小見出しには「地中海世界の征服」「ローマ帝国」の言葉が現れる。帝国の発展・変容がローマ史叙述を貫く基本線であることは間違いない。

ところが基本線はそればかりではないのである。顕著な例として第一を見よう。第一の大見出しは「ローマの発展」「ローマ帝国の盛衰」であるが、それぞれの小見出しは「共和政期のローマ」「共和政の変質」および「帝政期のローマ」「帝政の変質」である。要するに、共和政→帝政という体制の変化が実質的な叙述の枠をなしているのである。同じことは他にもあてはまる。先述のように三省堂は「地中海世界の統一」「帝国の分裂」の大見出しを掲げるが、前者の小見出しとして「共和政の成立」「帝政の成立」、後者は「帝政の危機」「帝政の衰退」などが見える。帝国の「世界帝国ローマ」の小見出しは、「共和政ローマの発展」「ローマ皇帝政治の成立」「後期ローマ帝国」などである。歴史の概説において政治体制の変遷が時代区分の基準となり、それを中心に叙述が展開するというのはごく一般的なことである。ギリシア史にあっては、アテネなどは貴族政→（僭主政→）民主政という「国制の転回」を遂げるわけで、それがポリス

の盛衰の歴史におけるダイナミズムの一環をなしている。ただ民主政にウェイトを置く視点からすると、民主政確立以前はそこに至るまでの過渡的段階の扱いにとどまるのに対し、ローマ史における共和政と帝政、また帝政の前期（元首政）と後期（専制君主政）は、より時代区分の枠組みとしての性格が強い。要するに、ギリシア史ではポリスの盛衰という縦糸が前面に出ているが、ローマ史の場合、帝国の盛衰に加え、ローマの体制変化という横糸がさらに絡み合い、二元的な叙述の展開を見せているわけである。

ここでまたしても山川を例に取り上げ、語りの筋道を追うこととしよう。まず「ローマ共和政」で初期ローマの国内の動き、とくに貴族と平民の身分闘争の過程が述べられる。つぎに「地中海征服とその影響」でローマの急速な対外発展とそれがローマ社会にもたらした反作用、中小農民の没落や奴隷制大土地所有制の展開などについて、「内乱の1世紀」で共和政末期に激化した混乱、なかんずくポンペイウス、カエサルら有力者たちの熾烈な政治闘争について概説する。ここまでが共和政史である。つづいて「ローマ帝国」ではアウグストゥスによる帝政の開始、以後五賢帝をへて3世紀はじめまでに至る帝国の安定と繁栄（ローマの平和）が述べられる。「西ローマ帝国の滅亡」は、軍人皇帝時代の内政的・対外的混乱とディオクレティアヌス帝による危機の收拾、以後の専制君主政時代における官僚制的支配、東西帝国分裂、そしてゲルマン人の移動と西ローマ帝国の滅亡、と帝政後期の歴史を略述する。ローマ帝政期のいま一つ重要な事項として、さらにキリスト教の成立と発展が別途論じられたのち（「キリスト教の成立」「迫害から国教へ」）、「高度な精神文化ではギリシアの模倣におわたったが」「実用的文化においては、すぐれた能力をみせた」というローマ文化の概要が述べられる（「ローマの生活と文化」）。

ギリシア史の場合に見るような叙述の一貫性は見られない。どちらかといえば、いかにも概説らしい概説となっている。このような印象を与える要因は、やはり政治体制の変遷という構成に則った話の展開となっているからであろう。ギリシア史のポリスに対応するローマ史の「帝国」のモチーフは、「地中海征服とその影響」の項でその確立が、「ローマ帝国」でその繁栄が語られるが、いずれも共和政史と帝政史の枠の一部に取まってしまっている。象徴的なのが「ローマ帝国」という小見出しのタイトルそれ自体であろう。ローマ「帝国」は共和政期に確立されたものであり、本来皇帝の支配、「帝政」とは異なる次元の実体であるにもかかわらず、「ローマ帝国」のタイトルのもとで帝政の成立と帝国の繁栄が述べられることで、あたかも両者が同一であるかのように見えてくる。ローマ帝国をローマ皇帝により統治された国ととらえる理解は、巷間よく見受けられる理解である¹³⁾（帝政（元首政）期の章節のタイトルに「帝国」の言葉をあてる教科書は、ほかに第一、東書がある）。ローマ史叙述を織り成す二本の糸、帝国の盛衰と体制の変容ということを先程指摘したが、実際にはこれらが対等に絡み合うのではなく、少なくとも帝政前期の部分までは、後者が前者を覆い包む形となっているとした方が、より正確なように思われる。ローマ史が一層概説的に見える所以であろう。

ローマの地中海征服は重大な国内的反作用をもたらし、それが背景となり共和政から帝政への体制転換が起こった、そして帝政下において帝国統治の安定化が実現される。山川の記述からはこうした歴史像が読み取れるが、これはあらゆる教科書に共通した共和政から帝政への移行の描き方でもある。他に顕著な例を一つ挙げれば、東書では「地中海世界の統一」に続く、共和政末期を扱う箇所の小見出しが「共和政国家の限界」となっており（48頁、傍点は筆者）、巨大化した版図を統治する能力をもちえぬ状況、帝政への移行の必然を表現している。「帝国」と「政治体制」の二つのモチーフは、このようにとりわけローマの拡

大と共和政から帝政へという部分において明確に脈絡づけられている。一方、2世紀後半以降、内外の情勢変化に伴い帝国は安定を失っていき、それを統合的に支配する困難さが元首政から専制君主政（後期帝政）へと体制を変化させる。いうなれば帝国の変容が、帝政期ローマの体制変化をもたらすわけである。このあたりについては、実教の「ローマ帝国の変質」および続く「専制君主政」の冒頭部分を引用しておこう。

「2世紀なかばにローマ帝国の繁栄にはかけりがみえてきた。カラカラ帝は、212年に帝国の全自由民にローマ市民権を与えたが、それはローマの都市国家的性格が名実ともに失われたことを意味した。やがてゲルマン人・パルティア・ペルシアなどの侵入や圧迫をまねいて政治も乱れ、各地の軍団が次々に皇帝をたてて争う**軍人皇帝時代**となった。都市は重税を課されて衰え、貨幣経済も不振におちいり、戦争と疫病のために人口は減少した。大土地所有者は、各地で所領を営んで独立する傾向を強めた。自由な農民の多くは没落して、それら所領の**コロヌス**（小作人）となっていった。

3世紀末に**ディオクレティアヌス**帝は、軍制・税制を刷新して帝国の再建につとめ、四分統治制を採用して秩序を回復した。彼は、皇帝権力の絶対化をすすめて、東方的な、皇帝にひざまずいて礼拝する儀礼を導入した。こうしてローマ帝国は**専制君主政**（ドミナトゥス）へと移行した。」（53-4頁、ゴチックは原文）

あえて簡略化していえば、共和政期は帝国の確立期、元首政期は繁栄期、専制君主政期は変容（衰退）期ということになる。こうした区分をかなり意識的に明快に打ち出すのが東書である。東書では、ローマ史の節の見出しが「都市国家から世界帝国へ」「ローマ帝国の繁栄」「古代末期社会と地中海世界の解体」となっている。内容的にも、「都市国家から世界帝国へ」にアウグストゥスまでの政治史の話を押しまつめ、つづく節では、一般的な「ローマの平和」の説明に加え、通常ローマ史全体の末尾に配置される文化、宗教、そして首都ローマの生活と風俗といった、思い切って文化・社会史中心の記述が行われていること、「古代末期社会と地中海世界の解体」では、まず「ローマ帝国の変貌」の項で政治・経済史的、「キリスト教の布教と聖なる世界」で精神的、「ゲルマン人の大移動と帝国の分裂」で対外的観点から、それぞれ帝国の変容と解体の問題に収斂する形で論が進められていること、という刮目すべき特徴が見られる。諸種教科書のなかで「帝国」のモチーフにもっとも密着した叙述といえるだろう。東書にやや近い構成を取るものに三省堂が挙げられる。三省堂はローマ史を「地中海世界の統一とローマ帝国」「ローマ帝国の分裂と西アジア」に分け、前半で帝政前期まで（共和政の終焉までではなく）を扱う。前半の記述内容は基本的に山川等と同じであるが、この部分の最後に文化を持ってきているところが東書と共通する。帝政後期を扱う後半は、東書と比べると概括的であるが、キリスト教の成立・発展を別個にではなく政治史の記述に織り交ぜて論ずる点に特徴が見られる。

さて、世界帝国へと発展したローマ文明の本質的特徴はどこにあるのか。この点にかかわる教科書の記述は散発的でまた必ずしも明確とはいえない。比較的まとまっているのは、またしても山川の「オリエンと地中海世界」の総論であろう。

「ギリシアの影響をうけてイタリアに誕生した都市国家の一つローマは、強大な軍事力を背景にやがて地中海周辺全域を統一した。ローマ帝国は以前からあったさまざまな文化・文明・民族を、地中海世界という一つのまとまりのなかに統合・吸収し、都市を中心にギリシア文化を継承発展させて植えつけた。「ローマの平和」のもとで繁栄した**ローマ文明**は、

その後のヨーロッパ文明の直接の母体である。一方、ローマ帝国に急速にひろがったキリスト教は、ギリシア文化とともにヨーロッパ思想の重要な源流となった。」(21頁、ゴチックは原文)

要するにギリシア文化を「継承発展」させるとともに、キリスト教を生み出し、来るべきヨーロッパ文明の源となった、いわば中継的役割を担ったというわけである。山川は同じくローマ文化を論じた箇所では、

「ローマ人は高度な精神文化ではギリシアの模倣におわったが、ギリシアから学んだ知識を帝国支配に応用する実用的文化においては、すぐれた能力をみせた。ローマ帝国の文化的意義は、その支配をとおして地中海世界のすみずみにギリシア・ローマの古典文化をひろめたことにある。」(49頁)

とも述べている。実教もまた、「ローマ帝国はギリシア文化を受けつぎ、やがて成長したキリスト教とともに、それらをヨーロッパ世界に伝えることになった」(30頁)「ローマ人は、実用的分野においてすぐれた文化を残したが、文学・芸術はギリシアの模倣に終始した。しかし、広大な地域にラテン語とローマ字を普及させ、古典文化を保存し、ヨーロッパ文明の源流となった」(56-7頁)と、同様なスタンスで記述する。

山川における書き方の特徴の一つは、ギリシア文化の影響の側面を強調し、ローマ文化自体の独自性をあまり認めないところであろう。¹⁴⁾「文芸や学問の分野では、ローマ人はギリシア人の独創性をこえられなかった」(50頁)といった表現に、それは顕著に現れている。他の教科書はもう少し穏やかな書き方をしている。帝国は、ローマはギリシア文化を取り込みつつ「独自の文化をうちたてた」とする(53頁)。また第一は次のような比較的均整の取れた記述を行っている。

「ローマ人は政治や軍事に関してすぐれた才能を発揮し、法律や土木建築など実用的な分野でも著しい業績を残した。とくにローマ法は、はじめローマ市民にだけ適用される市民法であったが、帝国各地の法慣習を取り入れ、すべての帝国民に適用できる万民法になった。6世紀に東ローマ帝国のユスティニアヌス帝が編纂させた『ローマ法大全』は、これを集大成したもので、ヨーロッパの近代法の基礎となった。

学問や芸術の面ではギリシアの影響が強かったが、アウグストゥスの時代を中心にラテン文学の全盛期をむかえた。・・・(中略)・・・

土木・建築では、道路や水道のほかコロッセウム(円形闘技場)、公共浴場、凱旋門などがつくられた。ローマ人は帝国各地のさまざまな文化を取り入れ、これを集大成して、のちのヨーロッパ文明に影響をあたえた。」(48頁、ゴチックは原文)

帝国各地の文化を「集大成」したとの言い方は漠然とはしているが、単なるギリシア文化の垂流ではないローマ文化のポジティブな実体を表現したものには違いない。そしてそのような「さまざまな文化」のなかに、キリスト教もまた含まれてくるであろう。

ギリシアのポリス文明を特徴づける市民の自由・独立は、ローマ史の叙述において前面に現れてこない。かろうじて山川の専制君主政の記述に、官僚制と社会の階層化の進展に伴い「ポリス以来の市民の自由は、完全に失われた」とあるのが目を引くぐらいである(46頁)。そもそもローマ社会はギリシア・ポリスと異なり格差が大きく、共和政期にあっても、身分闘争を経て市民間の法的平等が成ってのちも、「現実には民主政は生まれず、貴族と上層の平民からなる新しい貴族(ノビレス)が支配する体制(寡頭政)であった」(実教49頁、ゴチックは原文)、

「富裕な平民が台頭し、有力貴族とともに高位の公職を独占するようになり、彼らは新貴族（ノビレス）を形成した」（東書47頁）。むしろ持てる者と持たざる者の歴然たる格差を前提としつつ、両者の間に結ばれた特異な関係がローマの政治社会全体を大きく規定していったのだった。東書はこれに関してかなり突っ込んだ言及を行っている。

「都市生活における民衆の不満をいやすものとして、富裕な貴族や市民による食糧や娯楽の提供があり、「パンとサーカス」とよばれている。それは社会不安を回避しようとする遊民政策でもあったが、ローマ人の人間関係が作りあげた社会習俗でもあった。」

「皇帝、貴族、富裕者は穀物や見世物（戦車競争・剣闘士競技、演劇など）を提供する保護者であり、民衆は保護者の権威に従い、その統治を支持する被保護者であった。このような強者と弱者の相互関係は政治・社会のあらゆる人間関係のなかに浸透し、後世にいたるまで地中海地域に根強く存続した。」（51-2頁、ゴチックは原文）

保護者・被保護者の相互関係は市民の自由・独立とはかなり異質なものである。そうした意味で、東書の叙述はギリシアとローマの相違を浮き上がらせるものだといえるだろう。これに対し、専制君主政にいたるまでの市民の自由の存続を示唆する山川は、根本における両世界の共通性の考えを叙述の基礎に置いているといえる。¹⁵⁾

一方、あらゆる教科書に共通する基本認識は、ローマ文明は都市文明であるという点である。地中海規模に広がったローマの領域支配も、その文明の担い手となる土台は都市であった。帝国の繁栄はすなわち都市の繁栄をその指標とし（三省堂31頁、実教52頁、第一46頁、帝国49頁、東書50頁、山川45頁）、帝国の衰退（変容）は都市の衰退をその大きな特徴とする（三省堂35頁、実教54頁、第一47頁、帝国52頁、東書53頁、山川49頁）。都市の衰退と内陸における荘園の発達、地中海世界の変化の兆候であり、来るべき新しい時代の幕開けである。ただし都市文化の凋落は地中海世界全般にわたり同時期に起こったのではなく、まず帝国西部において進行し、東部はなおそれが健在なままビザンツ時代へと引き継がれるのであった（三省堂35頁、実教54頁、東書53頁、山川46頁）。

おわりに

世界史教科書は読み物として決して面白いものではない。なるべく主観を混じえず客観中立的に、かつむらなく諸事実を提示するというのが教科書記述における「叙述の伝統」である。客観中立的でむらなく、というのは一見好ましい条件のように見えるが、実際「語り」の要素をその本質とする歴史学にあっては、かえってその魅力を減殺させ、学習者の歴史離れを引き起こしかねないものである。もっとも、逆にもし執筆者が自らの史観のもと自由に素材を取捨選択し描き出すことができるとするならば、確かに読みやすく魅力的な歴史教科書となるかもしれないが、しかしこのことはまた別な意味で問題を引き起こすであろう。¹⁶⁾やはり教科書は手段であって、歴史を語る役目は一人一人の教師の手に委ねられるべきというのが、そして学習者それぞれが（ただ他者の見方を盲従的に受け入れるのでなく）主体的に自らの歴史観を構築していけるよう促すというのが、歴史教育本来のあり方であろう。

教科書を正しく利用するためにも、その叙述の特徴を理解しておくことが必要である。教科書は単なる歴史事実をならべた年表のようなものではなく、一つの歴史叙述である。したがってそこには執筆者自身の歴史認識が反映されているはずである。高校教科書にあってはあまり

問題とされない（かに見える）、そのような叙述のあり方に着目し、西洋古代史に限定して考察を試みたのが小稿であった。内容はあらためて繰り返さないが、諸種教科書を通読して分かるのは、表向きほとんどどれも変わらないようであり、微妙な部分で、しかしかなり基本的なところにおいて歴史認識の相違が反映されているということであった。実名を挙げれば、世界史Bとして高い採択率を誇る山川、西洋古代史に関する記述量が最も多い東書の2種は、比較的個性的な書き方をしているのではないと思われる。もちろんこれ以外の教科書もそれぞれ興味深い特徴が見出せる（本論では必ずしもこれらに逐一言及することはできなかった）。記述の絶対量が少ないからといって叙述の質が劣るわけではない。むしろ簡略であるがゆえにかえって本質を言い切る姿勢が見られるのに対し、言葉の多い教科書はその辺がかえって曖昧、ということもあるのである。教師がどの教科書を選び教えるかは、授業時間数や学習者の水準・進路といった要素のみならず、こうした内容的特徴を考慮しながら選択することが大事であろう。

注

- 1) 調査結果は公表していないが、その一部が2006年11月26日付『岩手日報』に報道された。
- 2) 数ある史学概論・歴史学入門の類のうち、筆者自身が親炙した二著のみを挙げておきたい、世良晃志郎『歴史学方法論の諸問題』木鐸社、1975年（第二版）；弓削達『歴史学入門』東京大学出版会、1986年。
- 3) 西洋近代経済史が専門の小田中直樹は同様な感想を述べる、『歴史学ってなんだ』PHP研究所、2004年、133-4頁。なお、ここで小田中が試みている世界史教科書の検証（読み直し）は、近代史中心ながら、きわめて興味深い（132頁以下）。
- 4) 小田中による高校世界史教員に対するインタビュー結果、『世界史の教室から』山川出版社、2007年、23頁以下。
- 5) 同26頁「教科書を利用せずに授業をしている教員が相当の割合で存在する・・・一方で教科書どおりに授業をすすめる教員もかなり存在する」。
- 6) 弓削達『地中海世界とローマ帝国』岩波書店、1977年、8頁。
- 7) 同9頁。
- 8) 太田秀通『東地中海世界』岩波書店、1977年；周藤芳幸『古代ギリシア 地中海への展開』京都大学学術出版会、2006年。
- 9) 歴史教科書における三時代区分の放棄が、戦後歴史学界の大きな流れの変化に対応するものであったことは、いうまでもない、岡崎勝世「三時代区分法の現在」歴史学研究会編『歴史学における方法的転回』青木書店、2002年、91頁以下参照。
- 10) 「地中海世界」という概念が人口に膾炙するようになったのは、おそらく旧版岩波講座世界歴史（1969-71年）においてそれが用いられてからである。
- 11) 弓削前掲書3頁。
- 12) 「生徒自身が生きる現代社会についての見方や考え方を成長させることのできる開かれた歴史学習」という「社会科歴史」（溝口和宏）の見地からすると、古代ギリシア史を学ぶ意義は第一にここに求められるかもしれない。なお、溝口の引用は、同「歴史教育の教科論的転回－「社会科歴史」の教育を求めて－」（2007年度日本西洋史学会シンポジウム「歴史教育への現代的アプローチ」報告要旨）による。

- 13) 日本語の本来の「帝国」の意味が「帝王の国」であるからには(吉村忠典『古代ローマ帝国の研究』岩波書店, 2003年, 42頁以下), 当然のことではある。
- 14) ローマに対するギリシア文化の優越という観念が, 近代ヨーロッパ(とりわけドイツ)に現れ一世を風靡した(そして明治以降の日本の西洋学にも影響を与えた)知的潮流に他ならないことについては, 高田康成『キケローヨーロッパの知的伝統』岩波書店, 1999年参照。
- 15) 山川は共和政期の新貴族(ノビレス)体制については直接触れることなく, 「だがローマではつねに元老院が実質的な指導権をもち続け, しかも非常時には独裁官(ディクタトル)が独裁権を行使するなどの点がギリシアの民主政とことなっていた」(42頁)として, ギリシア(アテネ)と対比している。ここでいう「ことなっていた」とは, ギリシアの民主政とは異なる内実の「民主政」だったとのニュアンスなのだろうか, それとも「民主政」とは呼び得ない実体であるとのことなのだろうか。
- 16) 例えば扶桑社刊『新しい歴史教科書』の孕む問題点については, あらためていうまでもない。

(2007年10月成稿)

